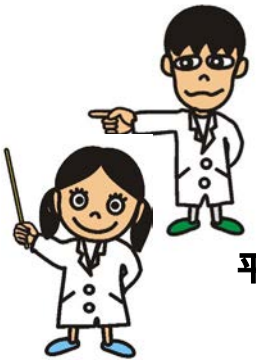
感染症に気をつけよう！



平成26年
【6月号】

横浜市内の感染症流行状況

感染症	流行状況		説明 ← クリック
伝染性紅斑（こうはん）	流行	増加	リンゴ病とも呼ばれます。区によっては警報レベルの流行がみられます。下の解説をご覧ください。
梅毒	やや流行	増加	全国的に増加しており、男性の同性間での感染が増えています。オーラルセックスでも感染の危険はあります。
感染性胃腸炎（ロタウイルス）	散発	やや増加	主に乳幼児がかかり、脱水症状が重いと入院も必要になります。予防にはワクチンが有効です。主治医に相談しましょう。

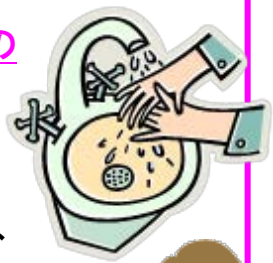
今、気をつけたい感染症 伝染性紅斑

4～5 歳を中心に、平成 23 年以来の流行となっています。同じ時期としては、過去 6 年間で 2 番目に多い報告数です。例年、7 月上旬頃にかけて増加する傾向があります。

国立感染症研究所 HP より

原因はヒトパルボウイルスB19 というウイルスの感染で、子供に多くみられます。患者の咳などのしぶきによる飛沫（ひまつ）あるいは接触で感染します。10～20 日の潜伏（せんぷく）期間の後、両方のほほにリンゴの様な紅い発疹が現れ、続いて手足にも発疹が出ます。

ほほに発疹が出る 7～10 日くらい前に、かぜの様な症状が見られる例が多いです。この時期に患者からの感染力が高くなっていますが、発疹が出る頃には、感染力はほぼ消えています。



予防には手洗いが大切です。妊婦が感染すると、胎児の異常や流産を起こす可能性があります。妊婦は伝染性紅斑の流行期には、かぜの様な症状の人に近付かないように注意しましょう。万一感染した場合には医療機関に相談し、胎児の状態をよく調べておくことが重要です。

発疹が現れた時には感染力はほぼ消えているため、一般的には全身状態が良ければ登校（園）できます。病状によって医師に相談しましょう。

横浜市衛生研究所　感染症・疫学情報課 【横浜市感染症情報センター】